保育園児による食事量の判断とその行動化の過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): nursery school lunch, buffet-style method, ethnography, guided participation, meal size 作成者: 小野, 友紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6999

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

学位論文審査の結果の要旨

報告番号　：　甲（又は乙）　第　　号

学位申請者	小野　友紀
論文題目	保育園児による食事量の判断とその行動化の過程
審査委員	主査　柴山　真琴
	副査　金田　卓也
	副査　青江　誠一郎
	砂上　史子　　（千葉大学）

提出された学位申請論文「保育園児による食事量の判断とその行動化の過程」の内容に関する査読審査と質疑応答を行った。

本研究は、一人の保育園児が食事活動への共同的参加を通して、自分の食事量を判断し盛り付けて食べるようになる過程を質的に解明した研究である。研究の背景として、保育園児の食事行動の形成に直接的・間接的に関わる相互作用の特徴を解明する研究(発達心理学・保育学領域)と食事摂取量評価に基づく栄養調査研究(栄養学領域)が並行してなされており、相互作用の特徴が園児の食事量とどのように関係するかは未解明であった。本研究では、＜保育園の食事活動の構造－相互作用－園児の食事行動＞の相互連関を、園児の選択幅が大きい「バイキング方式」の食事活動における「園児の食事量の判断と行動化」に着目して明らかにすることを目的とした。

本論文は、序章、第1章～第5章、終章、引用文献から構成されている。序章では、問題の提示、先行研究の検討と目的の設定、研究方法論と分析枠組みの説明がされている。「解釈的アプローチ」とエスノグラフィー・食事調査から構成される研究方法論に依拠し、学習過程を「コミュニティ」「相互作用」「個人」の3つのレベルから包括的に捉えるRogoff(1995)の「社会文化的アプローチ」を分析枠組みとして採用したことは、研究目的から見て適合的である。

第1章では、食事活動の構造を保育の信念体系・文化的技術との対応関係に着目して分析した(コミュニティレベルの分析)。その結果、「自主的個別保育」「たて割り混合保育」「園児一人ひとりの興味の重視」「ゆるやかな担当制による保育」という保育信念は、食事活動では「バイキング方式の食事提供の仕組み」「食事活動における有能な他者を生み出す仕組み」「自分の食事量を自分で判断する仕組み」「保育者が園児の食事量を把握しやすい仕組み」として具現化していること、「日課や食事活動の

手順」「着席の位置」「食器・食具・その他の道具」「食事提供の方法と食事内容」という保育の文化的技術は、「食事活動における盛り付けの仕組み」「他者への参照や関わりを誘発する仕組み」「使用する道具がもつ意味を共有する仕組み」「食事量判断を支える仕組み」として機能していることを示した。

第2章では、1・2歳児クラスにおける対象児－保育者/園児間の相互作用の特徴を分析した(相互作用レベルの分析)。その結果、この時期の相互作用過程は、①全ての盛り付けを保育者が行う「試し期」、②自分で盛り付けた後に保育者を参照して分量の適否を確認する「ゆらぎ期」、③保育者を参照せずに自分で全て盛り付ける「確定期」、という3つの時期から成ることを明らかにした。本結果については、日本質的心理学会誌に投稿し、掲載可と判断された。

第3章では、3歳以上児クラスに移行後の対象児－他児－保育者の相互作用の特徴を分析した(相互作用レベルの分析)。その結果、この時期の相互作用過程は、④保育者や他児を参照しつつも、従来の食事量を盛り付ける「慣れ期」、⑤年長児を参照しつつ、おかわりで食事量を調整する「修正期」、⑥箸使用が許可され、おかわりの分量が最初の盛り付け量を下回る「適応期」、⑦自分の好みや食事終了時間を意識しながら食事量を決める「定着期」、の4つの時期から成ることを明らかにした。第2章の3つの時期と合わせた7つの時期の存在は、本研究で初めて発見された新規な知見である。

第4章では、第2章・第3章の相互作用で使用された文化的道具(食器・食具など)に焦点を当て、道具の媒介性に着目して分析した。その結果、クラスを通して使用される同型の食器は、「保育者との意思疎通の手段」「盛り付け量を測る計器」「お姉さんぽく見えるための小道具」など、食事活動の手順の変化や対象児の箸使用に伴って、食器の機能が推移していることを見出した。

第5章では、対象児の変化過程を食事量判断の「スキルの専有」という視点から分析した(個人レベルの分析)。対象児は、食事提供方法が異なる保育園と家庭では、異なる食事量判断のスキルを習得し使い分けていることが確認された。また、対象児の食事量を栄養学的に評価した結果、不足傾向のある栄養素(カルシウム・鉄・ビタミンA)があるものの、摂取エネルギーの面では概ね良好な食事量を判断できていると考えられた。食事量に対する栄養学的な評価も適切になされている。

終章では、第1章から第5章で示された結果が分析枠組みと関連づけて整理され、丁寧な総合考察がなされている。特に上述の7つの時期の移行過程では、1)盛り付けと食事量判断の主体の移行、2)食べきる責任の移行、3)食事量の漸進的決定、4)食事終了時の参照軸の変化、という複数の変化が同時進行していたことを指摘し、それをわかりやすく図示化した点は高く評価できる。また、本研究の限界と課題についても的確に述べられている。

質疑応答による審査において、保育者の支援の特徴が保育者の専門性という観点から十分に考察されていないこと、対象児の食事量に見られるカルシウム摂取量の少なさに対する問題提起と解決策が示されていないことなどが指摘された。これらは、今後の課題として整理された。

本研究は、園児の食事量判断を促進する複数の仕組みが埋め込まれた食事活動に、保育者の応答的・段階的な支援を受けつつ他児を観察しながら共同的に参加できる状況では、園児による自分の

食事量の判断が可能であることを示すものである。これまで分断されてきた発達・保育学研究と栄養学研究を架橋する挑戦的な試みであり、園児の食事量という発達の個人的・生理的事象を保育園の食事活動の構造や相互作用の特徴という社会文化的事象と関連づけて総合的に解明した点に、本研究の先駆性と独自性がある。これまで研究蓄積がなかった3歳以上児の食事摂取に関する基礎データを提供した点でも、研究上の意義がある。また、食事活動の構成の仕方や保育者の支援のあり方など保育の実践現場に有益な示唆を与える点で、実践上の意義もある。全体的に見て、論文構成と分析枠組みの確かさ、データの厚み、記述の丁寧さなど完成度の高さも評価できる。以上から、提出された論文が「博士(生活科学)」の学位を授与するに相応しいことを、審査委員一同は認める。